

鹿児島市及び連携中枢都市圏3市のNPO（市民活動団体）のご紹介

ボランティアではない、NPOという生き方。



NPO法人くすの木自然館
 (代表理事 浜本 奈鼓/専務理事 浜本 麦)
 はまもと なこ / はまもと ばく

反対ではない、賛成の声を広げていく

奈鼓さんは、もともと「鹿児島自然観察会」として“地域の自然をいかに楽しんで伝えていくか”という自然観察指導員の養成を、事務局長・代表として10年間続けてきた。

1980年代バブル期は、リゾート地をつくるため、手つかずの山林や耕作放棄地になってしまった農地などがどんどん開発の波にのまれていく中で、それまで自然観察をしたり、鳥や森林と遊んでいた場所までもがターゲットとなっていく。

そうすると、普通ならその土地を守るための反対運動になってしまう。しかし、そういった「守れ」、「反対だ」ではなく、この場所は故郷にとって貴重なところで、魚類など生き物たちにとっても故郷であることを伝えたかったという奈鼓さん。そこから“本当にそうだね”と共感してくれる人たちと賛成運動の声を広げていこうという動きへ。講演を行い、共感してくれる方が増えることで、本業を圧迫するほどに講演や観察会のオファーが増えていった。環境系を職業とする人たちが台頭してくる時代ではあったが、鹿児島にはフィールドはあるものの、そういったものでお金を取ってはいけないという風潮があったという。

当時は、何かのために調査をするコンサルティングの仕事がメインだったため、自分がやりたいこととは少し違うなあと感じていた奈鼓さん。「私がやりたいことは、自分たちで調べて正しく伝えるということ。そのためには、直接現場なのか、こちらから出向くのか、文字、声、絵などいろんなタイプの伝え方ができるような仕組みがあること、同時にそういった取り組みをしている人たちの存在を多くの人に広めたいという気持ちがありました。」そこから息子の麦さんが小学校を卒業するタイミングで仕事を辞め、仲間とともに個人事務所「環境教育事務所くすの木自然館」を1995年3月に設立した。

小さいころから当たり前に触れてきた自然

父の仕事の関係で鹿児島市と県内の地方都市を往復するなかで育ってきた奈鼓さん。鹿児島の地方に行くとなんか農作業に牛を使っていたり、川で洗濯をしていたり、そんな風景が広がっていたという。奈鼓さん自身も川で泳いだり、自然に触れることは当たり前の生活。「食べたいものがあつたら自分でもぐって取ってこいと言う父だったので、小さい頃から自然に向いている子どもでした。自然が好きだというよりも、自然に興味があつたという感じ。だから今の子どもたちを自然に集中させるほうが難しい(笑)」

こんなに大切なことを、義務教育では教えてくれない

母 奈鼓さんの仕事が本格化し、祖父との時間が増えた幼少期の麦さん。

「いろんなところに連れて行ってもらう中で、鹿児島の自然は楽しいし面白いという気持ちはありましたが、この分野を仕事として家をこれだけ空ける母を思うと、自分は絶対にこの分野にはいかない！子どもにそんな寂しい思いはさせたくない！と思いました(笑)」

中学時代、飼い犬を助けてくれた獣医さんの姿を見て、生き物に接する仕事ってこんなにかっこいいんだと思い始めた麦さん。ちゃんと大学に行って学びたいと思い、進学に向けて猛勉強。高校に上がると、もともと海が好きだったことから、海洋生物の獣医になりたいと思い始める。さて大学を選ぼうと思ったときに同級生から出てきた「鹿児島って何もないよね」という言葉。それがずっと引っかかっていた麦さん。

「鹿児島には良いところがたくさんあるのに、県外に出ていくのが悔しくて。鹿児島の生き物を調べて、こんなにすごいんだってことを証明してやる！と心に決めました。」

そこから鹿児島大学の理学部へ進学。

ある日、大学の講義で「魚が自然界で何を食べているか知っているか？」と問われた。

そんなこと考えたこともなかった麦さんは恥ずかしくなった。答えは「ゴカイ」という生き物。ゴカイがいるから人間は魚を食べることができる。じゃあゴカイは何を食べるのか、それは人間が出している有機物。それを海で浄化してくれるのがゴカイという生き物。「こんな大切なこと、なんで義務教育で教えてくれないの？そう思いました。」学校では伝えきれない、もっとみんなに知ってほしい、そういう仕事ができる場所がないか調べてみたが見つからない。そこで麦さんが決めたこと。それは「くすの木自然館」に願書と履歴書を提出することだった。

1年目はごみ拾いからのスタート

研修期間3年間のうちに取り組んだことは、重富海岸の再生。自分の思い出の場所が荒れていることが悲しくて悔しい。二度とこんな思いを繰り返さないために、まずはごみ拾いから始めることに。現状とごみが少なくなるための対策を行政に伝える、同時に干潟の生き物たちの研究データを積み上げ、博物館に展示するための助成金を得るといったことに取り組んだ。自分で走り回って仕事をとり、事業をつくりあげる。ただお金を稼ぐのではなく、あくまで作りたい未来のために今この仕事をしないといけないんだというマインドセットも含めて学んでいった。

つくりたい社会や未来が共有できていること

くすの木自然館というチームとしての強みは、一緒にこういう社会をつくりたいという人たちが集まってきている、健全なかたちでチームができていることだという。約2年前に職員全員に向けて、そもそもどんな思いで作られた組織であるかを伝える機会をつくった。そうすることで一人ひとりの仕事への向き合い方が変わってきたという。「NPOの継承や次世代がないという問題はよく聞かれますが、若い人たちがやっていくことも大切だけど、若い人たちにこれまでの歴史を否定してほしくない。これまで作られてきたものを継承していくことと同時に、自分たちがつくりたい未来を考え、そこと社会をどうマッチングさせるかということも考えて仕事をしてもらいたいと考えています。」

最後に団体としての展望を伺った。ここ1~2年で力を入れているのは「共生・協働」という考え方。多くはボランティア、交通費程度で関わっているのが現状。NPOはただのボランティア団体ではなく、正当な対価をいただきながら参加していける社会になること。例えば、義務教育の中に環境教育が入り、そこをプロとしてサポートできる社会体制となっていくこと。また、世界ジオパークを目指したいと考えている。重富海岸は国立公園になるまでに約7年かかったが、この土地は世界にも認められるだけのものがあると自信をもって語るお二人。これだけの歴史を積み上げてきたくすの木自然館から学ぶことはまだまだあるように思う。

NPO法人くすの木自然館 団体概要

主な活動内容

環境教育や自然体験活動を通して、鹿児島を愛する人々を育て、豊かな郷土の風土（自然・文化・生活）を後世に良い状態で継承していくための環境保全・風土継承活動を行う。また、環境調査の生きたデータをもとに、環境教育を進める、調査・研究・教育・環境保全を行う専門機関である。



お問い合わせ

●団体名：NPO法人くすの木自然館

●代表理事：浜本 奈鼓/専務理事：浜本 麦

●Mail：office@kusunokishizenkan.com

●ホームページ http://kusunokishizenkan.com/